

# 覺憲撰「三國傳燈記」の研究

成 田 貞 寛

南都佛教復興に關する考察は、鎌倉佛教の展開史の中において、極めて重要な地位を占めることは申すまでもない。その復興運動の契機については種々これ數をえることが出来るが、中でも反省せしめられることは、從來あまりにも新興新來の諸宗に對する反動として、對立的にとらえられて來た觀さえあることである。むしろ南都佛教自らの歴史的現實の基盤の中から生れて來たものとして、とらえることがより自然であるように考えられる。勿論、新興新來の諸宗の開創に戟激されたことも事實であるが、他面、正像末の三時思想によつて釀成され來つた時代的危機觀は、時恰も平重衡の南都焼打の業火を頂點とする諸事件によつて、社會的現實の問題として、一大變革の機をもたらししたものと云ふことが出来る。やがて政治的政策の一環として、源賴朝による南都諸寺の復興が企圖せられるに及び、南都佛教界その内省自覺が要請せられ、勃然としておこつた復古精神を旺盛ならしめ、具體的には經論の開版事業、諸宗書目録の編集、歴史書、僧傳等の編纂事業を推進せしめ、又他方では律疏招來運動となり、やがて南都諸宗の教學の復興の機をもたらししたものと洵に刮目すべきものがある。

今こゝに、考察せんとする三國傳燈記は、かゝる復興運動のさきがけとして、南都の碩學、覺憲の撰にかゝるも

のである。この書は下巻の奥書によつても知られる如く、承安三年（一一七三年）八月九日、興福寺本願鎌足公の畫像の前で一座講筵の講師を勤めた際の草案であり、これを筆寫したのが弟子の信憲である。現在、本書の上巻は慶應義塾大學圖書館に善本として所藏、下巻は龍谷大學圖書館に藏せられているが、中巻は所在不明である。（もし所在、存知の方があれば御教示を乞う）、下巻については、かつて大屋徳城氏によつて紹介が試みられたが、装幀並に傳持者の紹介にとどまり、内容規定にまでは言及されず、たゞ凝然の三國佛法傳道緣起の先驅をなすものであるとの評價に終られている。また上巻については、阿部隆一先生によつて説明が試みられ、本書を高く評價する所以について次の如く結ばれている。即ち「本書を高く評價する所以は、覺憲が本講筵を開くに至つた動機にある。覺憲が示した現代えの關心、即ち末法時に際會しての佛法護持の意志、佛教界改革の祈願が史的關心を強く喚起し、史書撰述を必然的に促したと云う内面の脈絡と精神的動機である。凡ゆる優れたる史書は著者の現代えの強烈なる關心にその成立の動機を發する。かゝる意味で文化史的意義に於て、本書は正しく本格的史書である。本書は單なる本邦佛教通史の先驅たるの榮譽を荷うのみではない。眞の史書は來るべき時代の方角を豫言し先驅する。この書は鎌倉佛教に對し、宵の明星の光芒を放っている」と説いて、眞の史書たるの所以について説明を試みられた。しかしながら、いまだ大屋徳城氏の紹介を多く出づるものではなく、また全文についての判讀なり、内容規定についての詳細なる検討は進めておられない。故にこゝでは出來うる限り、本書の傳承關係を考證しながら、本書撰述の意圖する所を探り、その性格の一端について言及することにした。

## 二

本書の上巻と下巻が覺憲の弟子、信憲の筆寫にかゝるものとして、全くの僚卷であることは、傳承識語等によつ

て明らかであり、その内容についても一應、表紙見返しに各巻毎に標題目次を記しているから、これによつて大要を知ることが出来る。即ち次の如くである。先づ上巻では、

表白 說段前半／如來成道濫觴 在世三時／結集事迦葉阿難  
文殊等事 滅後三時／漢土傳來事 道士爭驗事／明帝以前來不久事 日本傳來事

### (下巻)

說段殘／國土料簡 時代料簡／未代殊可護佛法事 四衆共可欣信智事／廻向旨趣 祈句 廻向  
本書の冒頭は標題目次に續いて、大織冠内大臣藤原鎌足公の繪像を前にしての表白文となつてゐる。即ち、一代の教主釋迦如來等に對しての表白に始まり、維摩經講讃のおこりについて語ると共に、當代時世の下りたることゑの反省自覺の歛除について、

自<sub>レ</sub>欽明聖朝<sub>ニ</sub>至<sub>ニ</sub>今上御宇<sub>一</sub>。我朝佛法流行。己經<sub>ニ</sub>六百餘歲<sub>一</sub>。而時世屢遷年代彌遠。人無<sub>ニ</sub>智行<sub>一</sub>。俗及<sub>ニ</sub>澆醜<sub>一</sub>放逸不<sub>レ</sub>怖。六根之罪不信。不<sub>レ</sub>調<sub>ニ</sub>三業之善<sub>一</sub>。因茲<sub>ニ</sub>韜<sub>ニ</sub>大聖威<sub>一</sub>擇<sub>ニ</sub>尺教驗<sub>一</sub>。菩提樹下之靈像。今不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>出沒之程<sub>一</sub>。商那和修之法衣。其奈<sub>ニ</sub>損破廣狹<sub>一</sub>。何痛哉。佛教當時將隱。

と訴へてゐる。續いて、興福寺本願鎌足公への尊崇を語り、山階寺の建立、再び維摩經講讃についての濫觴と傳統について語ると共に、この會の意義について語り、再び教界への反省に思ひをいたし、

未代末世之爲體也無<sub>ニ</sub>清信男女<sub>一</sub>。佛法收<sub>レ</sub>威有<sub>ニ</sub>惡行比丘<sub>一</sub>。魔事爲<sub>レ</sub>祟。如<sub>レ</sub>醉而起顛倒之思。如<sub>レ</sub>眠而哥<sub>ニ</sub>貞直之行<sub>一</sub>。彼阿難如來之常隨 猶魔弊故令佛早滅度。何況於末世比丘。天魔誑<sub>ニ</sub>幼識<sub>一</sub>。波旬誘<sub>ニ</sub>童蒙<sub>一</sub>哉。故像法墜<sub>レ</sub>地在<sub>ニ</sub>今日<sub>一</sub>在<sub>ニ</sub>明日<sub>一</sub>。今佛法修學之侶、豈以不痛哉。

と嘆いて、世はまさに像法の末の世であることを指摘している。故に今、少僧は我が國の佛法を住持せしめ、我が

法相宗の教を絶えざらしめないがために一座講經の講筵を開き、興法利生を祈るのであるとして、本願聖靈鎌足公、春日權現えの祈請をこらし、最後に、「佛法住持の故に國家泰平、國家泰平の故に率土また無爲たり、四生の大小、三界の親疎、同じく善苗を殖えて共に當果を結ばん」と結んでゐる。この文によつて、本書の行間に流れてゐるものが、如何なるものであるかを窺い知ることが出來ると共に、本講筵を開くに至つた所以と、佛法傳來の所由を演ぶるに至つた所以について窺い知ることが出来る。

さて、表白文に次いで維摩經の講讀であるが、これについての順序次第については何等記さず、表白文の次に改行して「次釋經」と記すのみである。續いて成道の濫觴の項である。釋尊出世の本懷がつとに衆生を化せんが爲のものとして、八相成道示現せられし所以について語たり、法相宗獨自の在世、滅後の三時について、インドに於ける佛教の傳燈を説くと共に、佛滅後に於ける大小乗の三藏の結集について明かすのである。文中、その依據する典籍については明示されていないが、上卷では、宗家の釋云、慈恩大師釋云、慈恩所釋中云、大師釋云、眞諦三藏引微細律云、吉藏法師、天臺大師、祖師慈恩御意に依れば、等と六ヶ所ばかりあげ、依據する祖師名を記してゐる。この點、本書の下卷が依據する祖師名をあげながら、更に仁王般若經、蓮華面經、佛地論、大集經月藏分、無性攝論、辨中邊論、月燈三昧經等の經文の一部を引用して説述するのとは趣を異にしている。

さて、次に在世の三時、滅後の三時なる説示は、法相宗の教判として、もと解深密經無自性品第五の文によるものであり、他宗の教判とは異なり、祖師の案出せるものにあらず、佛の印可したものとて、宗祖慈恩大師の大乘法苑義林章卷一本、成唯識論述記卷一本、第二祖慧沼の成唯識論了義燈卷一本等に基づくものである。先づ在世の三時とは、佛陀說法の時期を三分し、初時有教、昔時(第二時)空教、今時(第三時)中道教と云えるものであり、初時有教とは、佛陀が成道後初時に鹿野苑で凡夫外道の二乗に發趣すべき者のために、我空法有の旨を説き、諸部の

阿含經所説の四諦の法門がこれであり、次に昔時空教とは、二乗の大乗に發趣すべき者のために、一切諸法皆空の旨を説いて法執を捨てしめたもう、諸部の般若經所説の空教がこれである。次に今時中道教とは、第三時に於て佛陀が普ねく五乗の機のために、非有非空の唯識中道の眞實了義を顯はせる妙教を説かれたものを云い、解深密經及び華嚴經の所説である。以上在世の三時の教説は佛陀善巧方便の施設による漸機誘引の趣旨によつて立てたるものであるが、若し頓機にあつては、何れの教説に依るとも直ちに佛意を悟了して、極理に體達する故に、三時悉く中道の一教たるわけで、何等三時の別があるのではない。かくて、三時の教判は必ずしも佛陀説法の年代的順序のみを意味するものではなく、その所説の經典よりこれを見ねばならぬとて、こゝに三時の次第について、年月の次第によるか、はたまた、年月の次第によらずして、經典の内容性質なる義類の次第に約するかの問題がおこつて來るのである。慈恩の成唯識論述記卷一本には、三時に年月の前後ありとしているが、惠沼の成唯識論了義燈卷一本には、これに二義あり、一には前後に約し、二つに義類に約すとあつて、年月の外に更に更に義類の一義を設けている。こゝに本教判において、年月、義類の異説紛爭をおこす原因となつた。蓋しこの紛爭は中國ではあまり見られず、わが國の唯識家に至つて論諍が展開せられ、特に鎌倉時代に於ける良算の同學鈔卷一之一、良遍の觀心覺夢鈔卷上等に於て論義せられ、唯識教學に於ける名所とまで言はれるに至つた。覺憲が在世の三時について語る所以、またその影響も大であつたであらうことを思うものである。以上在世の三時について、佛陀入滅の所以が衆生攝化の大悲より出ずるものであり、根機があいかなわざれば、遂に雙林に隠れたまうたことを語り、次に大小乗の三藏についての結集、滅後の三時の項に及ぶのであるが、こゝでは順序を逆にして先づ滅後の三時について述ぶことにしよう。在世の三時に對して滅後の三時を立てたのは、第二祖慧沼にして成唯識論了義燈卷一に明かすところである。すでに述ぶる如く、有空中の三時は漸機趣入の次第に約せる漸進的向上の經路であり、調機透引の所に自ら年月の三

時の経過をなすものであるが、佛滅後、インドに於ける佛教の興廢はまた、有空中の次第を経過せるの觀がある。即ち佛滅後百年に至つて、大天の五事の異議ありて教界紛亂し、遂に分れて二十部となるに至り、次いで第三百年の頃に迦多衍尼子、發智論を撰し、次いで法救、世友等出で、これを釋成し、我空法有の小乗教を説いたから、時人、遂に諸法實有の妄執をおこして大乘の法教は多く隱沒す。しかるに滅後七百年の頃に至つて、南天竺に龍樹、世に出で大智度論を造りて、大品般若を釋し、更に中論、十二門論等を造り、その弟子提婆はこれを受けて百論を著し、實有の執を破つて、諸法皆空の旨を宣説した。故に時人、これを聞いて多く空見に墮した。こゝに佛滅後九百年に至り、無着、世に出で大聖慈氏より瑜伽大論を相承し、その教の勝れたることの比なきことを説き、世親また、『二十』『三十』の妙論を説いたがために、多くの異生の迷いを散ぜしめ、非有非空の唯識中道の教が光輝を放つに至つたのである。蓋し、これ在世の三時に對して滅後の三時として、法相宗に於て力説せる所にして、インドに於ける佛教思想發展の經路次第の必然性を語るものである。<sup>③</sup>本書に於て、「所以中宗五分、盛行於四天一。相應十支傳ニ流於五印一。誠是至極之中道。能離ニ有無之邊一。以之名ニ滅後三時一也。」と結ぶ所以であらう。

### 三

次に大乘小乘三藏の結集についての記載であるが、これは慈恩の大乘法苑義林章第二、諸藏章十門分別の中、第一結集緣起の文に依據する所にして、義林章はまた、結集三藏傳、付法藏傳、大智度論第二、眞諦三藏の部執異論疏第二、大唐西域記第九、並に四分律等の所説を合集して説いている所である。迦葉之事、迦葉結集之事、阿難結集の事の三項目は、第一結集に關する一連の記述であるが、初め諸天の迦葉えの佛法建立の祈請に次いで、迦葉の如來遺法えの結集の決意と、阿難の斷結による結集えの參加、波旬の横暴と阿難の法藏誦出えの次第、及び小乗の

三藏結集についての諸部派の異説について説述している。しかし、特に本書に於て注意せしめられることは、諸部派の三藏結集についての異説ある中で、宗祖慈恩大師のとり所として西域記の説を出し、「所謂、阿難集素咀纒藏、優婆離集毘奈耶藏、迦葉波集阿毘達磨藏是也。今所結集是小乘三藏、摩揭陀國竹林園西南行五六里、南山之陰、大竹林中有大石室、王舍城七葉嶺是也。」と結んでいるが、これを以て大乘の正説であるとして、結集の場所を規定せることであろう。

次には、小乗の三藏の結集に對して、大乘の三藏の結集について語り、文殊・彌勒等の菩薩、鐵圍の山間に於て大乘の三藏を結集すとの説を掲げている。この説は從來、北魏の菩提流支三藏の金剛仙論、大智度論等に出づる説として認められていたものの如くである。即ち佛滅後、文殊菩薩を上首として、正法の消沈することを恐れ、末代の衆生をしてこの教を受けしめんがために、佛語を傳えて具葉に記すと述べるものである。これによつて大乘經典中の如是我聞は、傳法の菩薩それ自ら即ち、文殊を指し、小乘經中の如是我聞は、傳法の聖者、阿難それ自身を指すことを明し、更に西域記に於て、阿難・妙吉祥等の諸大菩薩、大乘の三藏を結集すとはあるは、二義を以て釋成すべしと説き、集法藏經、闍王懺悔經、正法念經、金剛仙論等の説に従つて、三阿難を認め、その中阿難伽羅は喜海持菩薩藏と云ふから、大乘の三藏を結集するものであると決し、吉藏法師、天臺大師、及び祖師慈恩大師の意に従つて名を別にするから、阿難は聲聞と雖も、實はこれ大菩薩であり、文殊、彌勒兩菩薩と共に大乘の三藏の結集の伴をなすのであると説いている。蓋し、この説は南都諸師の間に長く傳承せられ、凝然の八宗綱要、淨土源流章を初め多くの著書に出づる所である。以上諸大菩薩、諸大阿羅漢による大小乗の三藏の結集についての説述であるが、本書ではこれに續いて、先にも記せる如く滅後の三時として、インドに於ける佛教の興廢を語り、五部の大論、相應の十支論、インドに盛行せる所以を説述し、その傳燈の如何なるものなるかを知らしめんとするものである。

## 四

漢土傳來の項は、主として後漢の明帝の遣使求法の説についてあるが、これを三分して見ることが出来る。即ち初めには、後漢の明帝の永平七年、夢見金人により、通人傳毅の奏上、蔡愔等やがて月支國に到りて摩騰、法蘭にあい、これを懇請して永平十年十二月十三日、漢朝し達し、明帝ふかく敬し、皇都の西門外に白馬寺を建立せりとの部であり、次には摩騰の四十二章經の譯出と、法蘭の十地斷結經等の四部の譯出に關する部であり、第三には漢の武帝、昆明池を穿ちて、黒灰を得、東方朔に問ひしに、「知る所にあらず、法蘭に問ふべし」と答へ、法蘭時いたつて云はく、「世界すでに盡き、劫火洞燒す、この灰なり」とせる部である。以上中國に於けるかくの如き記述は、種々の段階を経て成立したと考えられるが、本書が依據せるものとしては、慧皎の高僧傳卷一、道宣の大唐內典錄卷一、集古今佛道論衡甲、廣弘明集卷九、智昇の開元釋教錄卷一、續集古今佛道論衡等であつたであらうと考えられる。

次に道士爭驗の項は、佛法傳來の初め、佛教徒と道教徒との角逐の次第を記せるものにして、道宣の集古今佛道論衡甲、及び智昇の續集古今佛道論衡所引の漢法本內傳の説によるものであらう。今しばらく、本書に記すところに従つて、その角逐の次第、狀況を記せば次の通りである。「永平十四年正月一日に至り、朝正の次で、五岳の道士は佛教徒と法力の驗を争ひ、その眞偽を決せんことを企圖するに至つた。こゝに於て、明帝は正月十五日、白馬寺に集りて比較せんことを約す。十一日、明帝は白馬寺に詣り、摩騰、法蘭二師に謁して曰く、「五岳の道士等、法師と比檢せんことを請う」と。摩騰法師曰く「如來の滅後壹千年、正に教法東に流れ、法は虚しく設くるにあらず、道士と驗を試さんこと、正にこれ時なり」と云ひ、法蘭法師も、「佛教の勝れたること道教の及ぶ所にあらず」



と言ひしにより、明帝これによつて、心大に歡喜し、乃ち文武内外の官人に勅して、十五日平旦、白馬寺に集まることを勅す。こゝに於て、南岳の道士、諸善信等七十人、華岳の道士、劉正念等七十人、恒岳の道士、桓文度等七十人、岱岳の道士、焦德心等七十人、嵩岳の道士、呂惠通等百四十人、五臺山等の八山の道士、祁文信等二百七十人、計六百九十名の道士、五百五十四卷の道教典を西壇におき、二十七家の經書惣じて二百三十五卷を中壇におき、饌食奠祀百靈を東壇におけり。十四日、明帝は寺の南門外に七實行殿を設け、佛舍利及び佛經像を安置す。いよいよ十五日に至り、明帝道士に謂いて曰く、「汝等驗を試さんと欲せば、今正にこれ時なり。先づ汝等の所能を顯はし、以て大衆に視せしめよ」。よつて、道士等經書に火を放ちたるに、化して悉く灰燼に歸す。その間、佛舍利は五色の光明を放ち、直ちに空中に上り旋環すること蓋の如く、遍く大衆を覆い、映じて日輪を蔽う。摩騰法師まづ阿羅漢果を得、神化自在、本處に還座して怡然として住す。時に天の寶華を雨らし、佛殿及び衆僧上にあり。又空中に諸樂の音を聞く。大衆歡喜し、未曾有と歎ず。また法蘭法師、偈を説いて曰く、「狐は師子の類にあらず、燈は日月の明にあらず、池は巨海の納なし。岳は崇岳の嶮なし。法雲世界に垂れ、善種開萌を得。希有の法顯通し、處々に群生を化す」。そこで明帝、座より法蘭法師の足を頂禮し、大衆に勅して云はく、「法を求めんと欲すれば、すゝんで法師の座に近づけ」、大衆法蘭法師を圍遶す。その時法師大梵音聲微妙第一を出す。佛の功德の不可思議を歎じ、大衆をして、三寶を稱揚し、善法を讃述せしむ。又人天の因縁、地獄の惡報を説き、或は小乘阿毗曇を説き、或は大乗摩訶衍を説き、或は懺悔滅罪を説き、或は出家の功德を説く。この時、四岳諸山の道士、呂惠通等六百二十八人、五品以上九十三人、九品以上百七十五人出家す。又京都の治民、張子尙等二百七十人出家す。明帝の後宮、陰夫人、王の婕妤等百九十人出家す。京都治民婦女阿潘等百二十一人出家す。十六日、明帝、大臣並に文武數百人と共に出家剃髮す。日々供を設け、夜々燈を燃やし、種々の伎樂をなす。三十日に至り、法衣瓶鉢等悉く施しおわる。即ち

十ヶ寺を建つ。城外に七ヶ寺を建て僧を安じ、城内に三ヶ寺を建て尼を安ず。こゝに於て漢朝の佛法これより盛になり、釋教相繼いでおこり、沙門踵を接して傳譯す。佛教の莫大なること稱美すること違あらざるなり。」と結んでいる。蓋し、もとより虚構の説であり、信憑するにたらざるものであるが、覺憲としては、本書の下卷に於ても言及している如く、佛教徒の自法を護ることを忘れてゐる現實を省み、道教徒の自法を護るための佛法を謗る所以のものであるとして、佛道爭驗について深き關心を示したものと思はれる。

明帝以前來不久事の項は、法琳の破邪論上下兩卷による所にして、明帝以前に於ても、佛教の中國傳來について語ることが出来るが、明帝の時に至つて始めて佛教が傳つたと云ふことが云いえられる所以について述ぶると共に、佛法いまだ中國に渡らざる以前にも、佛、三弟子を中國に遣して、中國を教化せられたとの説を述ぶる項である。

即ち如來の滅後百年、中天竺に阿育王あり、佛舍利を收めて鬼神をして散じて、八萬四千の寶塔を起こし、炎浮提に遍滿す。中國九州の中、普ねくこの寶塔の寺あり。故に佛法、周の世にも來つたが、秦の始皇帝の三十四年に典籍を燒き、諸塔を隱亡した。又始皇帝の時に、外國の沙門釋利防等十八人の賢人あり、佛經を將來して帝に獻るも、皇帝これに従はず、釋利防等を國禁に付した。ところが夜に至つて金剛丈六の人ありて、來りて獄を破りて、これを出さしむ。よつて始皇帝驚いて稽首禮謝せり。故に又佛法秦代にも來たることを知ることが出来るが、教の傳來は機と合しなれば、流通することが出来ないとして、「故知、又佛法來三千秦代」。然而教傳來機不合無緣流通。至三後漢明帝「教興機相應、世人修行之。故以明帝爲支那佛法之始也。」と説き後漢の明帝の時に至つて始めて教と機とが相應したが故に、世人これを修行したのである。故に明帝を以て中國佛法の始めとするなりと説いている。蓋し、覺憲が佛教傳來を機教相應と云ふことに關連せしめて把握していることは、史實はともあれ、時代を反影せしむるものとして、注意すべきことであり、やがて彼の弟子達によつて、法相教義を飛躍的に展開せしめた原

由ともなつたと考えられる。

## 五

日本傳來の項は、日本書紀欽明天皇の十三年の條下の文に最も多く依據せることは明らかである。即ち百濟の聖明王の佛像經論を獻する次第について説き、次いで天皇、佛像禮拜の可否を群臣に諮問せられしに、遂に決せざれば、試みに蘇我大臣に禮拜せしめられしに、疫氣おこり、民そこなわるゝにより、物部大連尾興、中臣連鎌子は佛像を以て難波の堀江に棄て、火を放ちて寺を燒き、時に風雨なきに雨降り、大殿を火災するに至つた。そこで朝議紛々として彼此の異論がおこつたが、天皇は佛法を崇重して、海内にこれを布かしめたと説いている。更に敏達天皇の十三年、豐浦尼寺建立のこと、崇峻天皇の五年、嶋大臣による大法興寺建立のこと、推古天皇の元年九月、上宮太子による四天王寺起工のこと、次いで推古天皇の十五年、上宮太子による法隆寺造立の事を説いているが、この文のみは日本書紀にはなく、おそらく上宮聖德法王帝説の文によつたものと考えられる。最後に舒明天皇の十一年、百濟川のほとりに九重の塔の建立のことを説き、文を結ぶにあたつて、「今如來遺法續雖レ傳于我國、未レ有智人傳受各弘宗趣」と説いて、眞の傳受者のなきことを歎いているが、こゝに覺憲の時代への覺醒の聲をきくことが出來ると共に、宗趣を廣むべきことへの決意の程を窺い知ることが出來よう。

以上、上卷に記す所を各項に従つて述べて來たのであるが、その意圖せる所は、維摩經講讀のおこりと、この會の意義について述ぶると共に、三國佛法傳來の概觀を述べ、時代と教界への反省、機教相應への反省の上に立つて、我が國の佛法を任持せしめ、特に法相宗の教を絶えざらしめんことを乞ひ願ひ、更に進んで興法利生への祈請を訴ふる所にその中心があると云ふことが出來るであらう。

## 六

下卷の内容はこれを分ちて、四つの部分に分つことが出来る。即ち國土料簡の部分と時代料簡の部分、末代の四衆ともに佛法を護り信智を欣うべきことを述ぶる部分と、本願聖靈鎌足公及び傳燈先德えの恩を報謝し奉る旨を述べ、安國利民除災興樂についての祈願、五趣四生に至るまで一味の益を得しめんとの回向についての部分である。

さて、國土料簡の項に於ては、先づ我が國が邊土の中の邊土、小國の中の小國であると規定すると共に、震旦、月支、五印より遠くへだたりたる故に、天竺の善無畏三藏は來朝したが、我が國の縑素はいまだかつて、一人として印度に達した者はない。蓋しこれは邊國の然らしむる所であると説き、釋迦えの追慕、聖蹟えの追懷の情を語ると共に、自ら顧みて出離期なく、時をはかりて十惡濫傾するをなげき、何れの歲月にか何れの聖衆に謁して、無始の妄熏習を翻じて、一念菩提の心を發すことが出來ようかとなげいている。次に護命僧正の大乘法相研神章、總願三界差別門下の文により、大日本國は南瞻部州の中の二の中州にあり、二の中州の中の遮末羅州であると佛教世界建立の説に従いながら定め、更に西域記所載の國々の事情をかえりみながら、我が國の佛法の隆盛なることの他國に異る所以を説述している。即ち小乗のみを學ぶ佉沙國、たゞ大乘のみを學ぶ瞿薩旦那國、或は大小兼學の奔那伐彈那國、或は天神を宗事とし佛法を信ぜず、佛法おこりしより今に至るまで、いまだ伽藍を建立せざる迦摩縷波國等の如く、また大唐國のように道士ありて、自法をおこすために佛法を誹謗する國等をあげて、これに對比せしめ、我が國は國封を傾捨して諸寺を建立し、多くの僧尼を度し、また大小の經論及び章疏等多分に來り、ために三學を學ぶ者、年々少なからず、四部の徒、歳々まことに多く、權現聖人和光垂跡、感應大士人同塵利生と結び、花嚴宗は最要なりと述べて、我がこの日本は大乘の世界であり、大乘根性の世界であると料簡している。更にまた、我が國の佛

法流布の由來をかえりみ、如來の滅後百年、阿輸迦王は寶塔をおこしてこの國に出し、繼體天皇は佛像を感じたまい、自後欽明天皇は釋迦佛像に歸依し、上宮太子は法華妙典を弘め、累代の聖王は三寶に歸依し、賢臣は踵を繼いで一乘を修行し、國封を傾捨して寺塔を建立し、家財を割分して大乘を崇重する旨を説き、聖王は赤子の愍みを萬民に降し、寒暑の恩を四衆におよぼし、かつまた南北に眞宗を弘め、顯密の教をおさめ、これによつて國毎に大乘をもてあそび、家毎に一佛乘を求めるとなつた。まことに日本國は大乘善根の界であり、人衆は菩薩種姓の類であると説き、更に華嚴經菩薩住處品の文を引き、その所說に従つて、我が國の諸山に諸尊の所居したまうことを擬え説く傳承あることを説いて、この國を以て輕んずべからず、諸佛大聖の所居し給う所であると説き、その人を貴ぶべし、菩薩乘姓の浮沈する所であると料簡している。

さて、次には再び我が國の佛法流布に思いをいたし、欽明天皇の御宇十三年壬申の年にはじまり、今上陛下の承安三年癸巳の年に至つて、六百二十二年であるが、佛法はまさしく人に依つて久しく住し、また人に依つて衰滅するのであると反省を促し、現実をかえりみて、今こゝに末代僧俗の體たらくたるや、恐らく佛法隱沒の基となすか、在家の男女は信心疎にして三寶を重ぜず、出家の僧侶は智行を闕いて名利の思い深く、不當なる行爲ことに甚だしく、形は沙門に似ているが心は出家ではない。しかも大僧戒壇にのみ登つて、比丘戒壇に登らず、名利の爲に佛法を修學し、伎藝を思いて無生の理を學ぶのである。故に智者は憍慢の心が甚だしく、愚者はそれに隨つて嫉妬の思いが深い。やゝもすれば諸寺鬭亂し、修學はこれがために廢し、或は怨んで寺塔を焚燒し、泥黎の報をおそれないのが現状であると論じ、仁王般若經、蓮華面經所説の師子、身中の虫の譬説をあげて、四部の徒のまさしく佛法を護るべきことの大切なことを説いてこの項を終つてゐる。蓋し、覺憲がこの項に於て力説せるところは、我が國が大唐印度に對して邊土の中の邊土であると規定し、また他面、南瞻部州の中、二の中州の中の遮末羅州であると

説き、佛法國である所以を説いてその特色を語り、我が國を以て、大乘の世界であり、大乘根姓の世界であると料簡し、佛法布流の由來をかえりみて、諸佛大聖の所居し給う所であり、菩薩乘姓の浮沈する所であると規定することである。しかしまた更に痛感せしめられることは、現實の教界えの反省に於て、四部の徒の墮落をなげき、佛法を護るべきとの決意は促し、王法と佛法との相資の上に、佛法の榮ゆることを願うこと切なるものあることである。

## 七

次に時代料簡の項に於ては、先づ現實の南都北嶺の諸寺の法滅の形勢をなげきかなしみ、正像末の三時についての料簡を試みている。即ち、慈恩大師の大乘法苑義林章卷第十一、金剛經讚述卷上、金剛般若論會釋等の説に従つて、如來の遺法に正像末の三時あることを述べ、更に金剛般若論會釋卷上の所説によつて、正像末三時の年數を計るに、二釋ありとして、「一云、正法五百年、像法一千年、末法萬年。一云、正法千年、像法如前。今此二義中、以正法千年爲正義」と説いて、二釋の中、正法千年説を以て正義となすと論じ、更に佛地論所説の如來の滅後、千載以前は清淨一味で乖謬もなかつたが、千載以後に至つて、空有の異論がおこつたとの説を引用して、正法止住千年説をとつている。更にまた祇洹精舍碑の正法千年、像法千年、末法萬年説、並に金剛般若論會釋卷上に記す、正法は本來千年止住の筈なるに、女人の出家入團を許したるが故、教團の間に諸種の紛亂おこり、正法の止住が五百年に半減したが、比丘尼に八敬法を行はしめたがために、かえつて五百年を増すことが出來たのであるとの意をとつて、正法千年説を正義として標榜している。しかし、こゝに改めて現實の時代をかえりみ、正像末の中、何れの時ぞやと問い、僧衆の不和合、天下の亂れ、我が朝の佛法の隱沒せんことをおそれかなしみ、如來滅後の年代に内外傳説の異説ありて、一にあらざることを述べ、大集經月藏分の如來滅後、五ヶ五百歳の説を併用して、時代料簡を試

みている。即ち如來滅後二千年説に依れば、今時は正像末の中、すでに末法の時代に入り、五ヶ五百歳の説に充當すれば、第五闡靜堅固の時代であり、縑素何れも和せず、日域の佛法は龍宮の大森に歸せんとすと、その隱沒の狀をなげいて、末法の時代に入れることを説いている。しかし他面、更に玄奘三藏の西域傳によつて、戒賢論師の出世が、如來遺法のいまだ二千年に及ばざる間であるとして、玄奘三藏の渡天年代、戒賢論師との面謁年時、等を勘案して如來滅後の年代を算定している。即ち護法菩薩の出世は、如來滅後千百年のことであり、戒賢論師は三十歳にして護法菩薩に従い、外道を降伏した。玄奘三藏は唐の太宗の貞觀三年に渡天したが、時恰も日本の第三十五代舒明天皇の即位元年に當る。かくて玄奘三藏は貞觀六年壬辰年に那爛陀寺に到り、正法藏に謁したが、戒賢論師は行年百六歳であつた。かくして戒賢論師は三十歳の時、外道を降伏して百六歳に至つたのであるから、七十七年を経過しており、如來滅後千七百七十七年にあたり、貞觀七年より日本の承安三年までは、五百四十一年を経過しているから、これを合すると、如來滅後千七百十八年に相當すると算定し、これを大集經月藏分の五ヶ五百年の説に充當すれば、第四の五百歳福德堅固の時であり、正像末の中、像法の末に相當すると料簡し、こゝに於て、像法日々に傾き、福德時々に衰え、闡靜しばしは相催し、像法まさに隠れんとすと説いて、この項を結んでいる。蓋し、覺憲のこの時代料簡は、どこまでも法相宗傳統の時代料簡に依據せるものであるが、現實の時代の様相に接しては、末法時に入れることをも否定せるものではない如くである。しかし究極的には、像法時の末と料簡し、佛法の隱沒の近きにあることを警告していると云ふべきである。しかしてかゝる危機觀は、慈恩等の先蹤にならない、やがて彌勒信仰として展開し、その弟子達によつて大いに鼓吹せらるるに至つた。

## 八

末代殊に佛法を護るべき事の項に於ては、既に佛法に入るの者たちには、先づ佛法を修學すれば、佛法の壽命をさゝえ、これを尊重すれば、難思の利益を獲ると説いて、如來の遺法を惜しむべきを説き、玄奘、義淨兩三藏の如きは、大教を弘むるために、身命を投げ出して渡天し、我が國に於ても、道照、道慈、傳教、弘法等の高僧は、顯密の法を我が國に傳えるために、萬里の波濤を越えて大陸に渡つたのであると説き、更に無性攝論、辨中邊論、月燈三昧經、大集經等に説かるゝ、身命を捨て、法を求むべく、又法を護るべく、その功德の超勝なるべき、の文を引用して、この項を終つてゐる。

次に四衆共に信智を欣うべき事の項に於ては、若し信あつて智なきの人は、愚痴をまし、惠あつて信なきの人は、邪見を増し、共に不備なる者なりとして、前者に對しては、佛教を習學して智惠を開發し、後者に對しては、三寶を輕ろんぜずして、深く因果を信すべきの旨を説き、次に信もなく惠もなき者は蟻蟻蚊蛇の類にして、來世必ず惡道に墮し、惡趣を出ることが出來ず、若し信も惠も共に具するの人は、淨土の菩薩に近い。深くこの旨を知るべきであると説いている。蓋し、覺憲のかゝる求法並に護法えの警覺は、やがて興律運動、律疏招來運動となり、南北二京に於ける戒律復興をもたらししたものと考えられる。<sup>⑥</sup>また四衆ともに信智を欣うべきことを説く所以は、まさにあるべき佛徒の行き方を示したものととして、注意すべきであらう。

## 九

次に廻向旨趣の項に於ては、この一座講經決擇のおこりが、専ら本願聖靈大織冠内大臣鎌足公の恩德を報謝し奉



り、春日明神のために法樂を陪増し奉るためであるとし、先づ鎌足公の御功績を述べると共に、鎌足公が一男定恵和尚に談山の地に寺塔を建て、釋教を流布せよとの夢告、更には増賀上人の夢の記に基づいて、大織冠聖靈こそ、近くは維摩居士の後身、遠くは金粟如來の應現であり、釋教の流布、興隆の濫觴は一重に大織冠鎌足公の御力によるものであり、國家の安全、藤原氏一門の繁榮もまた彼の力によるものではないかと説いている。更に我が寺の維摩會は、實に顯宗佛法の壽命であり、その先蹤は大織冠内大臣鎌足公の創めたまうところであり、五百年の歳月を経るもかくの如くである。故に海内の碩學、天下の高才、維摩經の文を講じ義を討ね、世々の後宮、代々の公卿等、續々として供役し、かくして不二の玄談を傳え、維摩の奥旨を留めることが出来るのである。若しこの會に於てかくの如きであるならば、蓋し、我が朝において、初めて佛敎に歸することを得たのは、上宮太子の御力であり、佛法を久しく我が國に住せしめしは、本願聖靈鎌足公の御力である。これによつて、在家出家、自宗他宗を問はず、三寶に歸依し、佛敎を學ぶ者、その恩德を報謝すべきである。ましてや我が寺の檀越、我が宗の學侶に於ておやである。こゝに少僧は、家に於ては藤氏の末裔であり、忝なくも曩祖の德を思い、法に入りては、山階寺の學侶であり、深く居士の哀れみをさとり、こゝを以て大織冠内大臣の御影に香花燈明を備え、法服を著し、手に香呂をさゝげ、無垢の妙文を講じ、佛敎の由來をのべ、故に惠業を生じ、専ら本願聖靈の恩德を報謝し奉り、更にまた春日大明神の法樂を増し奉るのであると結んでいる。

祈句の項に於ては、金輪陛下の十善運固く、百王の流れ久しく、三寶を崇むるは安國利民を以てし、佛敎に歸するは除災與樂を以てすることを述べ、次いで禪定仙院國母殿下、諸宮諸院、王子王女の轉禍爲福、増壽延年を祈り、殊には關白殿下藤氏群卿の息災安穩、福壽増長を祈ると共に、諸寺安穩、佛法繁昌を祈り、理運の災難を改めて、現來速疾に退散し、非常の惡事を改めて、當來未發に解脫せんことを祈つてゐる。

回向の項に於ては、專寺他寺を云はず、顯宗密宗を論ぜず、或は名利のために佛法を修學し、還つて佛法の魔事をなす者、或は一旦の惡念により、三寶に違背する者、或は惡念を改翻して、いまだ魔道の報を遁れずして、まさに善縁を欣うの者、悉く今これを廻向し、みな熏習開發して、還つて佛法に歸し、早く魔道を出で、佛教を護るのである。想ふに開闢以來、貴賤親疎を問はず、一切の諸靈、みな同じく佛道に歸し、しかのみならず、自宗他宗一切の祖師先德の傳燈の恩を報謝し、いまだ八地の位にあらざれば、早く八地の位に至り、すでに證位に登れば更に上位にすゝみて、三千大千世界の五趣四生に至るまで平等の利益濟度を得、第一義に歸し、無相海に入らんことを述べて文を結んでゐる。蓋し、この三項目の部分は、本書の上卷に於ける表白文とあい呼應するものにして、維摩經講讀のおこりが鎌足公のはじめたまうものであり、この會こそ顯宗佛法の壽命である、とこの會の意義について語る點、また釋教を興隆し流布せしめ、久しく住せしめし功績は、共に本願聖靈鎌足公の御力によるものであり、在家出家、自宗他宗を問はず、三寶に歸依し佛教を學ぶ者は、その恩德を報謝し奉るべきであると尊崇する點等、明かに相い應ずるものである。かくして、自らが藤氏の末裔であり、山階寺の學侶である自覺に立つて、藤氏群卿の息災安穩、福壽増長を祈ると共に、諸寺の安穩、佛法の繁昌を祈り、五趣四生に至るまで平等の利益を得、共に無相海に入らんと祈誓は、表白文の同じく善苗を殖え共に當果を結ばんとの結文に相い應ずるものと云うことが出來よう。

以上、下卷に記す所を各項に従つて説き、その意圖せる所要約して述べて來たが、その中心とせる所は、どこまでも我が國が佛法國であるにかゝわらず、今や法滅の時を迎えていることをなげき、佛法を護るべきことを訴えらるゝと共に、本願聖靈鎌足公えの恩德報謝と、相い共に無相海に入らんと祈請にあつたと云うことが出来るであらう。今、不幸にして中卷を缺くを以て、本書全文の脈絡なり、構造の全體に互つて、知ることは出来ないが、その

意圖せる所が奈邊にあるかを窺い知ることが出来るであらう。しかば、凝然の三國佛法傳通緣起の内容の如く、諸宗の各々に重點をおき、三國佛法の傳通を叙述せるものとは、その趣を異にしていることは明らかである。師蚕が本朝高僧傳に覺憲を傳して、

杖錫所駐。四衆景從。……憲略三絢八宗大綱。勅成三國通鈔。以授門弟子等。

と記しているが、三國通鈔は、おそらく三國傳燈記のことであり、この内容にして始めて、門弟等に授くと云う表現も、無理ではないように考えられる。又、四衆景從と云う表現の中に、覺憲その人の人格をもくみとることが出来るのではないかと考えられる。何れにしても、本書は平安末期より鎌倉初期に於ける、南都佛教徒の行くべき道を明示せるものとして、その影響も大であり、格調高きものであると言うことが出来るであらう。

# 註

① 覺憲は藤原通憲の子にして、特に戒律、因明唯識を以て宗とし、東大寺大佛開眼供養の導師を勤め、興福寺、大安寺の別當に任ず。始め大和壺坂寺に居り、後に興福寺寶積院に住す。建暦元年十二月十七日入寂。八十二歲。略傳としては、興福寺別當次第、卷之第三。招提千歲記、卷上の一。本朝高僧傳卷第十三。（以上日本佛教全書所收）また法系を示すものとしては、大乗院所傳の因明系譜。關東往還記裏書の律系譜第十一表、第十二表等をあげることが出来る。又日常の行實については、三會定一記、玉葉等を擧げることが出来る。

② 大屋徳城著「日本に於ける佛教史家の先驅並に其の著書」（日本佛教史の研究第一所收）

③ 阿部隆一著「三國傳燈記卷上について」（慶應義塾圖書館藏、和漢書本解題所收）

④ 深浦正文著「唯識學研究、下卷」一〇三頁に負うところ多い。

⑤ 高雄義堅著「末法思想と隋唐諸家の態度」（中國佛教史論所收）

⑥ 拙稿「鎌倉時代に於ける南都佛教の動向」（日本佛教會年報第三十三號所收）

⑦ 大日本佛教全書、本朝高僧傳第一、二〇六頁

（解説にあたり、引用した文献の典據は、資料本文の註を参照せられたい）

追記、以上不完全ではあるが、ひと先づ稿を終り、後日、改めて補足考究する豫定である。尙、本書を研究するにあたり、何かと御高配いただいた、慶應義塾大學圖書館の石川博道先生、阿部隆一先生、並に龍谷大學圖書館元館長、石田充之先生、館長磯野辰五郎先生、平春生先生に對し、深く謝意を表する次第である。

# 覺憲撰「三國傳燈記」 上卷・下卷

## 凡 例

一、本書は全三卷（中巻缺）、本文用紙は厚手の楮紙、両面書き、本文匡郭は單邊（六・一×四・一寸）有界の空押し。毎半葉六行、各行一七字。行書の漢文であるが、所々に返點、送假名あるもこれを省略し、句點はこれを付せず、一字取りとしてあけておいた。

二、各章の標題を示すに、行間に朱書されているが、これを「」でかこい、一行取りとして、これを示すことにした。

三、判讀困難にして不明な文字は□をもつてし、將來これを訂正し補足するものである。

【表紙】

三帳内

傳光曉

傳光祐

三國傳燈 上

範緣

【表紙裏】

表白 說段前半

如來成道濫觴 在世三時

結集事 迦葉 阿難 滅後三時

文殊等事

漢土傳來事 道士爭驗事

明帝以前來不久事 日本傳來事

傳印覺

印

### 三國傳燈記

#### 〔表白〕

敬白 一代教主釋迦如來十方一切諸簿伽  
梵最尊最勝無垢稱經難解難入一切聖教  
十地五修諸大薩埵 四願八輩諸大菩薩 殊  
文殊彌勒等大乘結集諸菩薩 迦葉阿難等小  
乘傳法諸聖者 忽同相別相一乘三乘眞實  
住持等一切三寶言 方今中秋上旬白月九日  
奉安圖繪大織冠內大臣影 備香花燈明種  
々供具 任先達筆削 講讀所持無垢稱經 隨  
管見所及 因演佛法傳來所由 講經之起何  
者 夫五竺梵典弘干漢土 八宗法門傳干  
和州 莫不如來之方便大聖之善巧衆生之  
機感往昔結緣 自欽明聖朝至今上御宇 我  
朝佛法流行 已經六百餘歲 而時世屢遷年  
代彌遠 人無智行俗及澆醜放逸不怖 六根  
之罪不信 不調三業之善 因茲韜大聖威 抑  
尺教驗 菩提樹下之靈像今不知出沒之程 商

那和修之法衣 其奈損破廣狹 何痛哉 佛教  
當時將隱 爰我寺本願聖靈大織冠內大臣  
者 內秘菩薩行外居人呂位 刻尺迦如來等丈六  
之靈像 爲大日本國一天之教主 國家由是  
無比 藤門由斯有榮 加之濟明天皇卽位四  
年戊午之歲 洒掃門庭而移廣嚴之精舍  
粧飭階宇而像方丈之淨室 卽屈福亮  
法師爲其講匠 甫演維摩之奧旨 感扣淨名  
之祕局 不二法門之名從此而興神通解脫  
之理自厥而顯 從其以際五百餘歲至于今  
不退轉 誠知佛法洪基只在此會者歟 而未  
代末世之爲休也 無清信男女 佛法收威 有  
惡行比丘魔事爲祟 如醉而起顛倒之思 如  
眠而哥貞直之行 彼阿難如來之常隨 猶魔  
弊故 令佛早滅度 何況於末世比丘 天魔誑幼  
識波旬誘童蒙哉 故像法墜地在今日在  
明日 今佛法修學之侶豈以不痛哉 因茲少  
僧爲令住持我國佛法 爲令不絕我等宗

法乎 自勤修一座講經 位々祈興法利生  
 事 非彼五障女身許得度 故千年正法減五百  
 行尼衆八敬法故正法還復本哉 若然者我  
 等輩身雖是相似沙門 志己在興隆佛法 所  
 思既真實也 所禱豈唐捐哉 伏願本願  
 聖靈起聶肩 挑我寺之法燈 春日權現耀  
 神威扶我等之佛法 惣日本國中諸寺諸佛  
 宗法久住修學興道 佛法住持故國家泰平  
 也 國家泰平故率土復無爲也 乃至四生大小  
 三界親疎 同殖善苗共結當果 講筵旨  
 趣大畧在此 併任三寶照見矣

次尺經

〔成道濫觴〕

抑佛教之趣一端可奉釋之 大慈大悲世尊  
 堪忍世界能化爲物 垂八相作物之化 逗機  
 施轉妙法輪之業 所以大師釋尊二十住劫之  
 半 第九滅劫之末 摩耶夫人之胎內宿等覺  
 無垢之妙體 淨飯大王之都中誕七寶輪王

之赤子 初生時即行七步 放大光明遍照十方  
 日顧而說偈言 我生胎分盡是最末後身

我已得解脫 當復度衆生云々 作是誓己身漸  
 長大 遊王宮四門 見老人病人死人沙門四相既  
 問之 己欲捨親屬 求無上果 卽命車匿進健  
 陟馬之蹄 諸天捧是 夜半出城行十四由旬 到  
 跋伽婆仙人所住林中 以刀剃髮持妙寶服  
 買鹿皮衣 於熙連河側六年苦行 詣菩提樹  
 下證大菩提 以智慧力降伏魔軍 證大菩提永出  
 三界 等正覺後 初七日間思惟行未說法 第  
 〔在世三時事〕①

二七日方始演說妙理而如日光 初現先照高  
 山之峯 然後漸及幽谷 如是佛日出魔界頓  
 悟 先熟漸機後成 是以第二七日爲頓悟之人  
 先說究竟大乘花嚴經 法界唯心之理

十々無盡之旨 誠是純諸菩薩之教 故非聲聞  
 緣覺之分 三七日後 方轉三乘通行法輪 所  
 謂爲解憐陳如等五人 轉四阿嚴藏法輪是



也 空所執實我 唯留溫處界等法 已悟

梁淨因果 漸登三乘聖位 次於鷲嶺等

說無相大乘十六會般若 破初時法有執

後演說深密楞伽法花涅槃等了義大乘教 遣

空有二邊之迷 會唯心中道之理 蕩小聖

懸崖之思 列平等大會之席 是名如來在世

有空中道三時 若對頓悟機 唯一時而

無二三 故宗家釋云 爲對漸悟說教三

時 若對頓悟無三時別云々 始從初成正覺

時 說高山頓大花嚴 終至赴涅槃金棺 宣大□

餘殘 雖可度之類 皆悉度畢 而如來大悲尙

未萎竭 雖大悲盡來際 根機不相稱 八十

年之夕二月十五日夜 佛日隱于雙林 法水咽

### 〔迦葉之事〕

干提河 爾時大迦葉尊者宴坐山林間 忽

燭光明又大地震動 大迦葉觀之曰 是何

祥 以天眼現見佛 世尊於雙林間入涅槃之

瑞相也 六欲諸天乃至遍淨天子等見諸羅

漢皆殷涅槃 心自念言 佛日既滅 諸弟子等亦

隨隱沒 象王已逝象子亦隨法 商既去從 誰

求法寶 爾時諸天禮迦葉足 而說偈言

耆年欲悉煩惱已除 其形譬如紫金柱

上下端嚴妙無比 眼目清淨如蓮華云々

卽白迦葉云 仁者知不 法船破法城頽 法

海竭法燈欲滅 法人欲去行 道人少惡人轉

盛 當以大悲建立佛法 爾時大迦葉心如大

海 澄淨不動 良久而答云 如汝言卽受

其請已 諸天禮迦葉足已 忽然不現 因

### 〔迦葉結集事〕③

茲迦葉尊者 爲結集如來遺法 住須彌

山頂 擊銅槌槌說一偈言

佛諸弟子 若念於佛 當報佛恩 莫入涅槃

云々 是槌聲傳迦葉語 遍三千界 皆

悉聞知故 諸大弟子得神通者 皆悉來

集會 至迦葉所 是時迦葉尊者告諸衆

云 如來寂滅世界空虛 當集法藏開報

佛恩 其有具三明 得六通聞持不謬 辨才無礙 如斯上人宜從結集 自餘學果各歸 所安爰得九百九十九人 唯除阿難

〔付阿難結集事〕④

在學地 迦葉告阿難云 汝未盡漏 宜出聖衆 阿難聆泣而曰 隨侍如來多歷年歲 每有法識 曾未棄遺 至將結集 今何擯斥 迦葉諫阿難云 勿懷憂惱 汝親侍佛 誠復多聞 然愛感未盡 習結未斷 是時阿難辭屈而出 至空寂處遂證羅漢果畢 往結集所叩門白 至此迦葉問曰 汝結盡耶 若然者宜運神通 非門而入 阿難承命從鎗陳入禮僧 己畢退而復座 爾時迦葉舉手云 善來阿難 便坐高座 修理衆僧 迦葉舉聲大命衆生 欲度世人皆來詣此 如佛所說種々諸法除衆生苦 阿難當說 十方當聞 是時天龍鬼神四部弟子 四果聖人諸王兵衆 聞聲皆至 波旬聞名 聲茲來到此 波旬心念一如來滅度更有三

賢聖 阿難結盡 迦葉頂光 那律徹現照大千界 雖喜瞿曇如來涅槃不妬 三聖所得廣大然法已以衰有何所□ 卽以方便滅法及人起化四共圍遶大會 令出可怖畏聲 阿難以智惠力 迦葉以精進力申乎 捕魔三屍繫咽 人屍狗屍蛇屍也 是時波旬謝迦葉請免脫 迦葉不放更又乞阿難 爾時阿難迦葉俱令波旬起誓 然後方得免 阿難在衆中如滿月明 帝尺在右梵王在左 宛如佛在時 阿難無畏容儀魏々如日光明 頂有日光 普照大會 阿難一心合掌向佛涅槃方 說偈言 佛初說法時 爾時我不見 如是展轉聞 佛在波羅捺佛爲五比丘初開甘露門 說四眞諦法 苦集盡道諦 阿若憍陳如最初得見道 八萬諸天衆 皆茲入道跡文 千阿羅漢聞此語已 上昇虛空 高七多羅樹皆言無常力大我等眼見佛說法 今乃言我聞 便說偈言 我見佛身相 猶如紫金山 妙相衆德滅 唯有名獨在

是故當方便求出於三界 勤集諸善法 涅槃最安樂

阿難長歎 如師子振歛 回顧衆生說聞如是

及一時 已地爲振動 一億天人盡得法眼

聞是法已天神及人三千比丘皆得漏盡 不

還八千 一來十千 無數天人得見道跡 眞諦

三藏引微細律云 阿難昇座集法藏 時

身如諸佛 具諸相好下座之時 還復本形

云々 衆生三疑 一疑佛大悲從涅槃起更說

妙法 二疑更有佛從他方來住此說法 三疑

彼阿難轉身成佛爲衆說法 今如是我聞者

遣此三疑也 所謂如是所說法我昔侍佛

親所曾聞 非佛處起 非他方佛至 非阿難

轉身成佛也 故經初云 如是我聞也 但集修多羅

等三藏 諸部異說 所謂集藏傳云 阿難

結集諸經以爲一藏 律爲二藏 大法爲三

藏 祿諸異法合集衆雜復爲一藏云々 是

四藏俱阿難結集 卽大衆部義也 依四分律

者阿難集二藏 優婆離集毗奈耶藏 是

法藏部義也 眞諦三藏部執論疏云 迦葉

令阿難頌五阿含集爲經藏 令富樓那誦

阿毗曇名付法藏 令優婆離誦毗奈耶 名

爲律藏云々 是薩婆多部義 慈恩大師

以西域記說爲大乘正說 所謂 阿難集素

咀纒藏 優婆離集毘奈耶藏 迦葉波集

阿毘達磨藏是也 今所結集者是小乘三

藏 摩揭陀國竹林園西南行五六里南山之陰

大竹林中有大石室 王舍城七葉窟是也

於此所安居 初十五日初結集之 雨三月盡

#### 〔文殊結集事〕<sup>④</sup>

集三藏畢 若言結集大乘三藏 文

殊彌勒等菩薩於鐵圍山間結集之故 慈

恩大師釋云 韶光於智惠之日 晦迹於涅槃之

山 金口無復金聲 化形息於化物 諸菩薩等

恐議年代綿遠 正法消沈 相率輪圍 共識結

集 僉言大聖貽則 豈唯獨益當時 茲令

末代含靈 同稟斯教佛雖滅度 其言尙

存 遂請曼殊室利菩薩而爲上首 重宣佛

語方書貝葉云々 由此可謂 大乘經中言如

是我聞者 傳法菩薩自指己身 所謂曼殊室

利是也 小乘經中云我聞者 是傳法聖

者阿難指自身也 但慈恩所釋中云 西域相

傳阿難妙吉祥等諸大菩薩 集大乘三藏

者 以二義可成 其心一 依集法藏經闍王

懺悔經正法念經金剛山論等者 有三阿難

一阿難此云慶喜持聲聞藏 二阿難跋陀此

云喜賢持獨覺藏 三阿難伽羅此云喜海持

菩薩藏 若准香□大師意者 是各別三人歟 若

爾 喜海是大菩薩 能持大乘 故阿難結集大乘

三藏也 若依吉藏法師天臺大師及祖師慈恩

御意者 但是二人隨德別名 依此意者 阿難雖

聲聞實是大菩薩故 爲大乘結集伴歟 故大師釋

言 阿難多聞々持 其聞積集三惠齊滿 文

義並持 於三藏教 惣持自在云々 何況涅槃經

中 阿難具八不思議德之中 第八如來所有

祕密言教並結解了云々 故爲大乘結集之

伴無過也 諸大菩薩諸大羅漢等 如此結集

如來所說大小乘三藏教法訖 或證涅槃或歸

〔滅後三時事〕⑥

本土 爰滅後弘經其類寔繁 摩訶提婆諍

五事 小乘部執競興 衆生多著有見 龍猛

菩薩證歡喜地 採集大乘無相空教 造中論等

究暢真要 除彼有見 聖提婆等諸大論師

造百論等 弘闕大義 衆生復著空見 無着

菩薩亦登初地證法見定 得大神通 事大慈尊請

說瑜伽論 大聖慈氏下中天竺闍闍國 經四

月夜分說十七地論 理無不窮 事無不盡 文無

不釋 義無不證 疑無不去 執無不破 行無不修

果無不證 正爲菩提 令於諸乘境行果等 皆得

善巧 勤修大行證大菩提 廣爲有情常無倒說

論爲餘乘 令依自法 修自分行 得自乘果 最

勝子菩薩以偈歎此論云 此論殊勝若蓮華 猶妙

寶藏如大海 具顯諸乘廣大義 善釋其文無

有遺云々 所以中宗五分盛行於四天 相應十支  
傳流於五印 誠是至極中道 能離有無之邊

〔漢土傳來〕⑦

卽以之名滅後三時也。爰如來滅後一千年  
後 如來遺教方傳於漢土 後漢明帝以永平  
七年甲子夢見金人 身長丈六紫摩金色  
項佩日輪 胷顯萬字 光明赫奕飛在殿  
前 明帝夢醒明日博問群臣 此何神異 爰

通人傳毅奏明帝曰 臣聞西域有得道者  
號之曰佛 階下所夢將必是 平常信用之 詔

遣蔡愔秦景等一十八人 往天竺尋訪

佛法 蔡愔等到月支國 卽遇摩騰法蘭

二人賢聖 秦景等固請之 誓志佛道

不辭疲苦 卽共秦景等冒涉流沙 至干洛

邑綵畫釋迦立像并四十二章經等 馱以白

馬 永平十年丁卯十二月十三日達于漢朝

明帝深以恭敬 皇都西門外立精舍 號曰

白馬寺 諸州相競報白馬恩 摩騰於白馬

寺譯出四十二章經 卽是漢地經論沙

門之始也 大化初傳 人未深信 蘊其妙解

不多翻之 摩騰卒後 法蘭又譯十地斷結

經等四部 又昔漢武帝 穿昆明池 底得黑

灰 武帝問之東方朔卽報曰 非所知 可問

西域胡人 法蘭既至時退以問之 法蘭奏白

世界終盡 劫火洞燒此灰是也 東方朔矣

〔道土爭驗事〕⑧

既有徵 信者甚衆 永平十四年正月一日

五岳諸山道士等朝正之次 上表請與西域

道人試驗 決其眞僞 道士等總明利智

博通道教 或履水而行水不能溺 或積薪

自燒火不能損 或白日昇天 或隱形於地作

種々咒禁 策使鬼神 經方藥法術 無不能

者 明帝曰無自辱哉 恐以螢火之光望日月

之暉 道士等既所信 帝卽許 至此月十五

日平旦 忽集白馬寺與汝等比較 歡喜而

去 至十一日明帝詣白馬寺 向摩騰法蘭二

法師稽首曰 請五岳道士與法師比檢 弟子

輒不自重 呂祕許尅此月十五日 願法師垂

哀開視法藥 此時摩騰法師報曰 如來滅

後一千餘年 正教東流 法不虛設 道士

欲試 今正此時 今仰論正法諸佛威 得爲開

悟 又法蘭法師云 龍吟雲起非蚯蚓所能

虎嘯風生 非跛驢所及 明帝聞此言心

大歡喜 勅有司令并供設 并勅文武內

外官人 十五日平旦普集白馬寺 十三日

諸道士白馬寺南門外道東置三壇 南

岳道士褚善信等七十人 帶一百三卷

書 華岳道士劉正念等七十人 將六十二局

書 恒岳道士桓文慶等七十人 帶八十卷

書 岱岳道士焦得心等七十人 帶八十五卷

嵩岳道士呂惠通等一百四十人 帶九十

五卷書 五台山等八山道士祁文信等

二百七十人 帶八十四卷書 都五百五十四局

道教置之西壇 二十七家經書惣二百三十

五卷置之中壇 饌食爇祀百靈 置之東

壇 十四日帝設七寶行殿 在寺南門外道

西 置佛舍利及佛經像 至十五日帝謂道

士曰 汝等欲試驗 今正是時 先顯汝等所

能 以視大衆 道士等在勅卽以柴荻和

栴檀流水香 積遶西壇經教上 啼泣啓

告曰 上啓衆仙百靈 今胡神亂夏 人主信

邪 置經壇上以火取驗 欲開曉未聞 使

有所信 便放火燒經々從火化悉成灰燼

道士等見火焚經 心火驚怖 先時昇天

者不復能昇 先時能隱形者 不復能隱 先

時入火者不復能入 先時善咒禁者 呼策

不應 道士等大生慚愧 爾時大傳張衡語

南岳道士褚善信曰 汝今所試無驗 卽

是虛妄 宜就西域眞法 褚善信不答

與南岳道士費殊二人在衆中 自憾而

死門 從子弟歸葬南岳 爾時舍利放五色

光明直上空中 旋環如蓋 遍覆大衆映蔽

日輪 摩騰法師先得羅漢果 以慈善力

踊身 高飛行臥空中 作十八反 神化自在

還坐本處怡然而住 于時天雨寶華在

佛殿及衆僧上 又聞空中諸樂之音 感

動人情 大衆歡喜 歎未曾有 法蘭法師即

說偈曰 狐非師子類 燈非日月明 池無巨海

納 丘無嵩岳嶸 法雲垂世界善種得

開萌 顯通希有法 處々化群生云々 明帝

即從座起頂禮法蘭法師足 勅諸大衆

云 欲求法前近法師座 爾時大衆圍遶

法蘭法師 數百餘 重法師又出大梵音

微妙第一 歎佛功德不思議 茲會大衆

稱揚三寶 讚述善法 又說人天因緣地

獄惡報 或說小乘阿毗曇 或說大乘摩

訶衍 或說懺悔滅罪 或說出家功德 此時

四岳諸山道士呂惠通等六百二十八發

心出家 五品以上九十三人出家 九品以上二百

七十五人出家 京都治民張子尙等二百

七十人出家 明帝後宮陰夫人王婕妤等

一百九十人出家 京都治民婦女阿潘等

一百二十一人出家 十六日明帝共大臣并

文武數百人 與出家者剃髮 日々設供

夜々燃燈作種々伎樂 比至三十日法衣

瓶鉢悉施訖 卽立十寺 城外七寺安僧

城內三寺安尼 漢朝佛法從此盛也 尺教

相繼雲興 沙門接踵傳譯 佛教莫大 不

〔明帝以前來不久事〕⑥

遑稱美者也 佛教傳辰旦明帝以前粗

有之 所謂如來滅後一百餘年 中天竺

摩揭陀國 俱□摩城有阿育王 收佛舍利

役使鬼神 散起八萬四千寶塔 遍滿炎

浮提 辰旦九州之中普有此寶塔寺 故

知 佛法周世到漢地 而至秦始皇三十四

年 梵燒典籍 塔婆由之隱 又始皇之時

有外國沙門釋利防等一十八賢者 將來

佛經獻始皇 皇不從 遂國禁利防等

夜有金剛丈六人來破獄出之 始皇驚怖稽首禮謝 故知又佛法來干秦代 然而教傳來機不合無緣流通 至後漢明帝 教與機相應 世人修行之故 以明帝爲支那佛法之始也 佛法未渡漢土以前 如來利物之方便不可思議故 清淨法行經云佛遣三弟子辰旦教化 儒童菩薩彼稱孔丘 光淨菩薩彼云顏回 摩訶迦葉彼稱老子云々 內典天地經云佛遣三聖化彼東土 迦葉菩薩彼稱老子云々 三歸則如君子求三畏 五戒又同仁義禮智信 是卽自淺至深之方便 從世間及出世之發端也

〔日本傳來事〕<sup>⑩</sup>

漢土佛法來干我大日本國者 欽明天皇御宇十三年壬申冬十月十三日辛酉 百濟國聖明王始獻金銅尺迦佛像一軀 並經論幡蓋等 其表云 是法於諸法中

最爲殊勝 難解難入周公孔子尙不能知此法 能生無量無邊福德果報 乃至成辨無上菩提 如人懷隨意寶所須 依情此妙法最尊 然祈願隨情 無所念少 遠自天竺爰洎三韓 依教奉持 無不尊敬 渡傳帝國 流通畿內 佛之所記我法東流矣 天皇聞已歡喜踊躍詔使者云 朕從昔來 未曾得聞如是微妙之法 然朕不能自決 乃歷問群臣曰 西蕃獻佛相貌端嚴全未曾有 可禮不 蘇我大臣奏曰 西蕃諸國一皆禮之 日本豈獨背哉 物部大連尾興中臣鎌子等奏云 我國家之王天下者恒以天地社稷百八十神 春夏秋冬祭爲事 然今改拜蕃神 恐致國神之怒 天皇曰 宜隨情願付蘇我大臣 試令禮拜 大臣悅受安置小治田家 勤修出世之業 次捨向原家爲寺 是時疾疫盛興矣 於是



物部尾興大連等奏曰 不須臣等之計

致此病死 縱火燔寺 于時無風雲而雨

火災大殿 雖朝議紛紜彼此異論 而天

皇崇重普布海內 其後敏達天皇

御宇十三年关刼 始排道場 今豐浦

尼寺是也 十三年甲辰嶋大臣奏

天皇復興佛法 經營佛殿 於宅東 乃

石川宅也 崇峻天皇御宇五年歲次壬子

嶋大臣起大法興寺 今飛鳥寺是也 推古

天皇御宇关丑秋九月上宮太子起四天

王寺 今難波四天王寺是也 十五年丁卯

上宮太子造法隆寺 今鵜寺是也

館明天皇御宇十一年冬十一月建九重

塔於百濟川側 今大安寺是也 今如來

遣法續雖傳于我國 未有智人傳受

各弘宗趣

註

①『大乘法苑義林章』 卷一本 大正藏經第四十五卷 二四八頁中段

『成唯識論述記』 卷一本 大正藏經第四十三卷 二二九頁下段

『成唯識論了義燈』 卷一本 大正藏經第四十三卷 六六〇頁下段

②『大乘法苑義林章』 卷二 大正藏經第四十五卷 二六八頁中段

③『大乘法苑義林章』 卷二 大正藏經第四十五卷 二六九頁上段

④『大乘法苑義林章』 卷二 大正藏經第四十五卷 二六九頁下段

⑤『大乘法苑義林章』 卷二 大正藏經第四十五卷 二七〇頁下段

⑥『成唯識論了義燈』 卷一本 大正藏經第四十三卷 六五九頁上段

⑦『高僧傳』 卷一 大正第五十卷 三三二頁下段

『大唐內典錄』 卷一 大正第五十五卷 二二〇頁中段

『集古今佛道論衡』 甲 大正藏經 第五十二卷 三六三頁下段

『廣弘明集』 卷九 大正藏經第五十二卷 一四七頁下段

『開元釋教錄』 卷一 大正藏經第五十五卷 四七八頁上段

『續集古今佛道論衡』 卷一 大正藏經第五十二卷

三九七頁下段

⑧『集古今佛道論衡』 甲 大正藏經第五十二卷 三六三頁

下段

『續集古今佛道論衡』 卷一 大正藏經第五十二卷 三九

八頁中段

『破邪論』 卷上 大正藏經第五十二卷 四七九頁中段

⑨『破邪論』 卷上 大正藏經第五十二卷 四七八頁下段

同上 四八四頁下段

⑩『日本書紀』 卷十九、国史大系第一卷下 七六頁

〔表紙〕

三帳内

三國傳燈記 下卷

傳光曉

傳光祐

範緣

〔表紙裏〕

說段殘

國土料簡 時代料簡

末代殊可護佛法事 四衆共可欣信智事

廻向旨趣 祈句 廻向

傳印覺

印

〔國土時代料簡先國土事〕〔說明殘也〕

我日本葦原境者邊土中邊土 小國中之小國也 震旦一州 尙渡百萬里之波濤 五印沉隔幾千萬之山河 因茲昔天竺婆羅門僧正善無畏三藏人 雖適際臨我聖朝而我國縉素未曾一人達印度 蓋是邊國之令然故也 恨者生彌離車之境 隔拜見於五竺之聖跡 在佛滅後之末 囑行證於正法之住世 如來成道之地 唯聞名而不望遺跡 正法開演之處 纔披記 而不見其實 顧身出離無期也 推時十惡濫傾也 更何歲月謁何聖衆 翻無始妄熏習 發一念菩薩心哉 爰披護命僧正釋<sup>①</sup> 息我等卑下 知我國神妙 所謂大日本國者 南州之中有二中州中 迹末羅州是也 准何得知 既不大州 非四大州隨一 又五百小州或無有人或有非人 或唯空居也 所以日本國當中州也 案西域記或有唯學小乘 如

佉沙國等 或有唯學大乘 如瞿薩旦那國 或有大小兼學 如奔那代禪那國等 或有宗事天神不信佛法 故自佛興迄于今 尙未建立伽藍 如迦摩縷波國土 又有外道 誹謗佛法 害生祠天 以此因緣多墮地獄者 又大唐國多有道士 欲興自法亦謗佛法 然我日本國聖朝 都無此類 傾捨國封 建立諸寺多度僧尼 復大小經論及章疏等多分皆來 所以三學之輩年々不少 四部之徒歲々良多 權現聖人 和光垂迹 感應大士 人同塵利生 花嚴宗今辰最要 我此日本大乘世界 聖皇重代 崇仰三寶 賢臣繼跡 安養四民間昔見今方是大乘根性世界云々 先德此謂尤實哉 案日本國佛法流布由來 如來滅後一百年中 阿輸迦王起寶塔出此國 繼體天皇感佛像於和州 自後欽明天皇歸依尺迦佛像 上官太子弘通法花妙典 聖王

累代歸依三寶 賢臣繼踵修行一乘 傾  
捨國寶 建立寺塔 割分家財崇重大

乘 赤子之愍降於萬民 寒暑之恩及於

四衆 南北弘眞宗 顯密修佛法 由此每國

旣摩訶衍 每家求一佛乘 應謂 日本

國是大乘善根之界 人衆菩薩種姓之

類也 故八十花嚴菩薩住處品云 海中有

處名金剛山 從昔已來諸菩薩衆 於中止住

現有菩薩名曰法起 與其眷屬諸菩薩衆千

二百人俱 常在其中而演說法 云々 金剛

山者卽擬我朝葛木山也 此緣起者大唐

國第三仙人日本國侵優婆塞 金剛山

法起菩薩 金峯山大政威德 箕面山龍樹

菩薩瀧基大聖不動尊 三世遊化隨類

身愛惜留跡是箕面云云 以不可輕此國

諸佛大聖之所居山也 可貴於其人 菩薩乘性之

所浮沈也 我朝佛法流 自欽明天皇御

宇十三年壬申 至今上陛下承安三年关

已合經六百廿二年也 而佛法依人而久住  
是亦由人而衰滅 爰末代道俗爲體也 恐

爲佛法隱沒之基者歟 在家男女信心

是疎不重三寶 出家僧尼智行闕少 名

利思深 時中僧侶之不當 近代殊以甚

形似沙門 心未出家 改登大僧戒壇而爲

登戒比丘 爲名利修學佛法 思伎藝學

無生理 智人付其甚憍慢之心 愚者隨

其深嫉妬之思 動諸寺闍亂 修學爲

之廢 或怨焚燒寺塔 不懼泥黎之報

或故致多少之人 不憚大聖之所別 或先

德云 凡夫與凡夫 樂顯他失 聖人與聖

人更表其德 是爲賴耳云々 其演誠乎

仁王般若經云<sup>⑧</sup> 大王我滅度後 未來世中

四部弟子 諸小國王太子王子乃是住持

護三寶者 爰滅破三寶 如師子身中

虫自食師子 非外道也 云々 四部弟子住據

佛法 國王百官擁護三寶 佛教依此二〇

住世間 而四部不住據國王 不擁護佛法  
 卽滅也 譬如師子身中虫 自食師子肉故  
 蓮華面經中 佛告阿難云 譬如師子命  
 終身死 若空若地若水若陸所有衆生  
 不食噉彼師子身肉 唯師子身自生諸虫  
 還自噉食師子之肉 阿難我之佛法非  
 餘能壞 是我法中諸惡比丘 破我三大  
 阿僧祇劫積行勤苦所集佛法云云 蓮華  
 面經喻出家之人 仁王般若經在家出  
 家類 寬狹雖異喻呪之意一同也 傳  
 大士之法欲滅時 先國災發 黑白俱惱  
 玉石皆死云々

〔時代事〕

今見日本國形勢 若諸

寺佛法滅盡形之相催歟 可悲也可歎  
 也 凡如來遺法有正像末三時 有教行  
 證三爲正法 有教行無證名像法 唯有  
 教無行證是末法也 而慈恩大師於此作

二釋 一云正法五百年 像法一千年 末法  
 萬年 一云正法千年 像法如前 今此二  
 義中 以正法千年爲正義 故佛地論云 而菩薩  
 藏 千載以前清淨一味無有乖謬 千載  
 以後乃興空有二種異論 是故說言 如來  
 正法但經千載云々 又祇洹精舍碑文云 正  
 法千年像法千年末法萬年云々 又由  
 女人出家故損正法五百年 然由比丘尼  
 行八敬法故 返增五百年 故知正法千  
 歲也 而今時代正像末中是何時 僧衆  
 不和合 天下不調 我朝佛法將隱沒哉  
 經云 如來滅後年歲 內外傳說非一 何  
 是何非 或云已餘千二千年 或茲云未足  
 二千年 又大集經月藏分說 如來滅後  
 五ヶ五百歲 所謂 初五百年解脫堅固 第二  
 五百年禪定堅固 第三五百年多聞堅  
 固 第四五百年造塔寺等福德堅固 第  
 五五百年闍靜堅固云々 若依如來滅后

二千餘年說 今時正像末中 己入末法

五々百歲 當闍靜堅固 宜哉 歸此闍靜

縑素不和 日域佛法欲歸龍宮大森 若

由遍學三藏遊西域傳 論師出世者 遺

法未及二千年 所謂護法菩薩出世 如來滅

後千一百年後也 戒賢論師年甫卅

代於護法降伏外道 爰遍學三藏

唐太宗貞觀三年己丑 發步西天

當日本第三十五代舒明天皇卽位

元年己丑 貞觀六年壬辰年 到那欄

陀寺謁正法藏 于時論師行年一百六歲

也 自戒賢年始卅 降伏外道 至一百六歲

壬辰年經七十七年 合經一千一百七十

七年 自貞觀七年至日本承安三年

經五百四十一年 然言之如來滅後一

千七百一十八年歟 故依此義 正像末中

像法之末五々百歲福德堅固時也 若

爾像法日々傾 福德時々衰闍靜屢

相催 像法方欲隱

〔末代殊可護佛法事〕

入佛法之輩努力

々々可惜如來遺法 百千萬劫中難

值此法 故修學之 支佛法之壽命 尊

重之 獲難思之利益 彼雪山欣半偈之

人 不惜軀命於羅刹 四方訪大法之人

雖供給於仙人 又不聞乎 玄奘義淨爲

弘大教於未聞 寄一生國 赴萬死堺 又

不見赴 道照 道慈 傳教 弘法萬里波

縑纒傳顯密法於我國 祖師先達

鄭重如此 如我來□豈木石草故 無性

攝論云 由所流教勝故 捨身命求此善

說云々辨中邊論云<sup>⑧</sup> 設有火坑等三千界

爲求此法投身而取 不以爲難云々夫改一

□□時護佛法功德殊勝也 故十輪經義

記引經說云 千假服効中 智者勤修定

所生勝覺惠不如護我法云々月燈三昧

經云若於正法衰末世 如是佛法欲滅時

於一日夜能護法 所獲功德勝於彼云々

大集經云法獲最妙勝食□ 是故智

者應護法 十方諸佛天龍神功德智

惠所攝□云々設得利養勿作惡事

惡行之福魔界之所勸也 縱困貧弊

可護佛法 好善之貧佛界之所試也

#### 〔四衆共可欣信智事〕

若

有信而無智之人 增愚癡 如伊吹山三

修見現身 見現身魔緣之來迎 一向

信聖衆迎接故也 故若男若女在家出

家習學佛教 可開發智惠 或有惠

無信之人增邪見 如仙王院智光 罵詈

行基菩薩必蒙□王哥也 故不輕三寶

深可信因果 若無信無惠不異螻蟻

蚊蛇 來世必墮惡道 常不出惡趣 若信

與惠共是 此人近淨土菩薩 深可知此旨

也

#### 〔廻向旨趣〕

抑此一座講經決擇之起者 專奉報

我寺本願聖靈大織冠內大臣恩德

而又奉爲春日大明神陪壇法樂也

夫大織冠內大臣者 春日之末孫也 藤

氏之始祖也 寄重國家 功銘鐘□

匡濟王室以寧天下 如一男定惠和

尙 在唐時夢想者 計者是不實人

歟 所謂天智天皇御宇 丁卯年和尙行年

二十二 爲拜五臺山入唐 天武天皇治

天下戊寅歲 歸朝謁右大臣不比等

相語曰 吾在唐時 己巳十月十六日時

夜二更夢言吾身 忽居日本談岑

大織冠告曰 吾今上天 汝此地建寺塔修

淨業 降神當嶺 擁護後葉 流布釋

教 是則大織冠早世之日也 若不權

者者豈以□哉 依增賀上人夢記者 是



淨名後身也。故彼夢記云。卽生年十歲。登叡山楞嚴院。入慈惠大師室。年至十九。學藥王品文句兼學維摩疏第一卷。暫時發心慕安養界。學業之餘時々念佛。年至卅三天曆二年戊申八月二日。夢曰逐川流入幽谷。有一伽藍。基跡年尙。僧徒屢住。當坤隅有一平地。縱廣丈餘。視老翁立。首戴青冠。身被赤裘。左手持經卷。右手携仙杖。天女天童仕立前後。卽問曰。仁詎乎。應曰毗耶離城居士也。住此千餘年。化緣未盡。住此處者多悟佛智。汝志淨利。居遂素懷。語畢隱也。夢覺之後不知奈何。漸過十有五年。至應和三年。关辰七月。依入道君御勸。始入談岑川流谷路。堂宇僧坊一如昔夢。卽卜居此地。忽結三間一面草庵。住云云。爰知大織冠

聖靈者。近淨名大士後身。遠金粟如來之應現也。釋教流布。興隆藍觴。豈不由彼力乎。國家安全。藤門榮繁。亦是誰扶持哉。時中我寺維摩大會。爲顯宗佛法壽命。訪其曩蹤。是大織冠內大臣之所創也。積五百餘之星霜。大會如曩。引四十口之龍。玄談惟新。海內碩學。天下高才。講文討義。世々后宮代々公卿。續々供役。彌知淨名之垂跡。傳不二玄談。於我國金粟之現應。留維摩奧旨。於此會若然者。倩案我朝佛法流布。我朝初歸佛教。是上皇太子御力也。佛法久住我國。亦本願聖靈御力也。因茲在家出家。自宗他宗。歸依三寶。學佛教者。爭可奉報謝其功德。何況於我寺檀越我宗學侶哉。爰少僧在家爲藤氏之末裔。忝思曩祖之德。入法爲山階之學侶。深賢居

士之哀 是以大織冠內大臣御影前  
備香花燈明供具 手自身著法服  
手擎香呂 講無垢之妙文 演佛教之由  
來 以所生惠業 專奉報謝本願聖  
靈恩德 宜復奉增春日大明神法樂

〔祈句〕

伏願金輪陛下十善運固 百王流久  
崇三寶以安國利民 歸佛教以除災  
與樂 禪定仙院國母殿下 諸宮諸  
院王子王女轉禍爲福 增壽延年  
殊闢白殿下藤氏群卿 息災安穩增  
長福壽 一家泰平子孫繁昌 三臺  
九棘百群千僚同浴佛海之無邊 須  
保壽木之不老 諸寺安穩歷億劫 □  
無反 佛法繁昌契三會 □永遺別  
我大伽藍一生補處之宗 遠至龍華  
之曉 三千餘口之侶不鳴禪林之枝 寺  
內寺外開三寶之福田 僧綱凡僧植

萬善之種子 四所社壇日々之法味鎮  
備 七堂佛教 年々之齋會 不怠 改  
理運災難 現來速疾退散 改非常  
惡事 當來未發解脫

〔回向〕

經以來至于今

不謂專寺他寺 不論顯宗密宗 或爲  
名利修學佛法 還爲佛法魔事之輩 或  
答一旦惡念 違背三寶之族 或改翻  
惡念 未遁魔道報 方欣善緣之者 今  
悉廻向之 皆昔熏修開發 還歸佛法  
早出魔道 更護佛教 忽開闢以來貴  
賤親疎 一切諸靈皆同歸佛道 加之  
奉謝自宗他宗祖師先德傳燈恩 未  
八地位昇八地位 已登證位 更進上位乃  
至三千大千五趣四生平等々々利益 濟  
度鹿言免語 皆歸第一義 餘念散亂  
以混無相海 抑所講經初文 □

三國傳燈記

承安三年八月九日 微僧覺憲奉爲

我寺本願聖靈勤行一座講筵用此

愚草畢 其間之誤謬退可糺之云々

講師覺憲 問者信憲 同廿日書寫之 信憲

永錄七甲子三月十日 從胤繼律師御房相傳之光祐

註

- ① 『大乘法相研神章』日本大藏經、法相宗章疏二、三五五頁
- ② 大正藏經第十卷、二四一頁中段
- ③ 大正藏經第八卷八三二頁下段
- ④ 大正藏經第十二卷一〇七二頁下段
- ⑤ 『金剛般若論會釋』卷上、大正藏經第四十卷七三六頁上段
- ⑥ 大正藏經第二十六卷三〇七頁上段
- ⑦ 大正藏經第十三卷、三六三頁上段
- ⑧ 大正藏經第三十一卷、四六八頁上段
- ⑨ 大正藏經、第十五卷、六〇二頁下段

